



Title	漢字漢語管見
Author(s)	新村, 出
Citation	懷德. 1936, 14, p. 15-38
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88949">https://hdl.handle.net/11094/88949</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 漢字漢語管見

新 村 出

今日は私甚だ不束な身をもちまして記念會の後で、拙演を試みる光榮を有するに至つたのでありますが、皆様の前で殊に懷德堂の先賢の牌を後ろにしてお話申上げるとは、恐縮千萬に存じて居りましたので、一應御辭退申上げたのでありますが、何か私の平素究めて居ることよりしいから、何なりと致すようにといふお言葉に甘へまして、この席へ罷出ることになつた次第であります。

私は御存じの方もおありの通り、言葉の學問を聊か致して居る身でございます。どうか致しますると我國の言葉の側から、支那の文字、言語を側面的に見るやうなことは致しますが、深い高い漢學の方は一向心得て居らないのであります。纔に國語の側から漢字漢語を見ることを聊か致して居るのに過ぎないのでございます。殊に近年は先輩故人の辭書の編纂を聊か補助を致したり、自らも進んでささやかな辭典を試作致したり、幾分の經驗を積みましたので、申さばそれらの餘材と致しまして、支那の言葉のことを少しばかり究めたことがあるのであります。且又それらの經驗をいたしましたと同時に、我國の古典の一つである萬葉集の歌の四千五百首ばかりあります中の約一千首ばかり

りを、その道の人が英譯を致して、それを遠く海外の人に見せてやらうといふやうな事になつて、吾々同人協力して英譯の事業に従事して居るのであります。その英譯のことに参加いたしてをりまする關係上、萬葉集中の名物などを英譯するに當りまして、色々の疑惑が生ずるのであります。何と譯していゝかといふことを究めまするに先立つては、その物が千二三百年前にどういふ物を指したものであらうか、たゞ漠然漢字を當てましたり、國語を以て吾々が讀んで居ります時は、その趣味を理會し、漠然その目にも會得したやうに感じて居るのであります。これを新に他の言葉に譯して責任を以て確實に示さうとなりますと、平素大様に、大まかに、臆氣に心得て居つたものが、非常な不審疑惑に逢着せざるを得ないのであります。それやこれやの必要から致しまして、最近色々の名前、殊に植物の名前、動物の名前に就て少しばかり究めたことがございますので、それらの二三の點を捉へまして、一時間半程御靜聽を汚し、先進の諸先生も御列席でありますので、私の話を御叱正願ふ好機會とも考へましたので、旁々此處に罷出た次第であります。

支那の文字の根元、或は支那の言語の沿革を研究するといふやうなことは、非常に困難な業でありまして私共の敢てこれを試むる所ではないのであります。たゞ單に我國の動植物の名稱などと、支那の漢字の動植物の名稱とが相該當するや否や、その適否如何を、二三の場合について検討致して見たいと考へたのであります。一月にして一語、三月にして二語といふやうな工合に、悠長に一語一字の

詮索をぼつり／＼心懸けて居る次第でありますので、今日はそれらの成果の中から二三の實例を摘み出して申し上げようと思ふのであります。

さて漢字の字書に就ては、今から千三百年前の天武天皇の勅撰による字引などが出来たこともあつたのであります。日本書紀によるといふと、天武天皇の十一年、支那では丁度則天武后が天下を威歴するといふやうな時代であつたのでありますが、その時に四十四卷の新字を學者が編纂されたことがあつたのであります。その時——平安朝以來、延喜年間よりも少し前に、「新撰字鏡」十二卷が現はれ、二三十年後れまして、村上天皇の承平年中には、これ又著名であります「和名類聚抄」十卷或は二十卷を、皇室の皇女の方の御内命によつて編纂されたものがあつて以來、平安朝末期には「伊呂波字類抄」、鎌倉初期には「類聚名義抄」といふものが出来まして、各時代色々漢字の讀方、本義を明かにする努力は絶えなかつたのであります。室町時代になりましたは、「節用集」といふ通俗の辭書が度々出て、一般の日本人に如何なる漢字を如何なる國語に當つべきや、その當否正邪は姑く措きまして、漢字の當方、書方を教へる通俗的の字書が出来ました。徳川時代になりましたは、貝原益軒先生が元祿時代に於きまして、日本書紀の支那の類句の「釋名」によつて「日本釋名」三卷を作りまして、稍後れて享保年中には江戸の新井白石先生が「東雅」二十卷を作りましたり、伊藤東涯先生がこれは専ら漢語の側から見て、「名物六帖」といふものを編纂されて以來、數々の學者向き乃至通俗向きの字書

が、我國に輩出致したのであります。今日のやうに言語の學問が進みました時代に見ますと、歴史的の價値は姑く措きまして、漢字漢語の我國の言葉の本義に適當なるや否やといふことを考究するに就きましては、もの足りない點が非常に多いのであります。私共新時代の人達に必要な通俗的な、或は學究的な言語の字書を編纂しようとするに當りまして、種々の疑惑が生じ、獨力では到底及ばない、これを分擔した。所が何萬の言葉を究めると、漢字との對照に就て、私共が當れるや否やといふことが到底出來ず、日暮れて道遠しといふ感を深くするのであります。私の見た所は九牛の一毛でありまして、全く日本の古典の言葉、或は中世の言葉から考察致しまする側面觀に過ぎないのであります。その二三の點を例示致しまして、皆様の御高教を仰がうと存じます。

一例を擧げて見ますならば「アヅサ」といふ木がありまして、「梓シ」といふ字を書きます。これを日本では「アヅサ」と読んで居るのであります。それで吾々は毫もあやしまないのであります。段々調べて見ますといふと、どうも當つてないやうに考へられるのであります。尤もこの頃は漢字の知識が覺束なくなる一方でありまして、私共も専門の方や、先進の方に比べますといふと、漢語漢字の知識が覺束なくなつて居ることを感ずるのであります。又後進の若い者になりますと、さういふことが多々あるのであります。それで以前私の小さな著述を出版した梓書房といふ本屋があつたのであります。どんな場合でも梓といふ字へ一々あづあづと假名が振つてあるので、こんな分り切つた字に

假名を振る必要がないぢやないかと言つて、本屋の主人をたしなめました所、本屋の主人曰く、これをあづさと讀んでくれる人がない、木扁に辛シと書くのでこれを「からし」と讀む、それで困りますので、一々假名を振りますと言ふので、私も今更ながら漢字の知識は一般には益々覺束なくなるもんだと笑つたことがあるのであります。併しながら何ぞ知らん、私共もアヅサとは讀んで居りますけれども、日本のアヅサの木と支那の梓といふ木とは全く違ふ。少くとも日本の古典に於けるアヅサといふ木と、即ち弓にして非常に強靱な其のアヅサといふものと、支那の「梓」といふ漢字とは意味が違ふ。字の意味即ち支那の漢字の現はす所の本義と、それに當てた所の國語との相違は、これは今日私  
が改めてことごとくしく申上げることまでもなく、皆様は色々の場合に於てお心付きであらうと存じます。又吾々が習ひました英語などでも、プラム(Plum)は梅と當てて居りますが、あゝいふ清香なる香りを放つ梅は西洋には全くない。斯ういふやうに東西に當らないことが種々ありますが、鳥の名に致しましても、支那の黃鳥といふのは日本のウグヒスとは違ひますし、大體それに當てるより仕方がないといふわけで、自覺的に當てたと想像されませう。況や英語のナイチンゲールといふのを鶯と當てましたのは全く違ひまして、夜から曉にかけて鳴きます鳥と、夜は鳴かない鶯と違ひますが、自覺して餘儀なく當てた字があります。このアヅサの木の如きは、今日のこととは後廻しに致しまして、古典時代に遡つて見まするといふと、萬葉集中に、梓を當てました所は、三十四五ヶ所散見致します。古

事記の歌に一ヶ所見えて居ります。弓の場合、皆「あづさ弓」といふ言葉として出て参ります。或る時に於ては枕言葉として現はれて来て居ります。一々の例證を申し上げますと長くなり申すから申上げません、その以後の古今集の歌になりますと、歌人は實物を見ず、それがアツサといふ木の材料で出来たかどうかといふことを究めないで、たゞ傳統的にアツサと呼んで居たのでありますから、もの實質を究めようとするには、萬葉集にはこれが當りますけれども、新古今集以後は、京都の大宮人の歌なり文章なりは、あまり例にするには足りないものでありますから、先づ萬葉集を典據とすることに致して置きます。

それから六國志の中にも、例へば續日本紀でありますとか、或は平安朝の中期に出来ました延喜式とかいふものにも、梓弓のことが出て参るのであります。或は伊勢の太神宮に於ける梓弓のことを書きましたもの、天平時代に東大寺へ献上になつた所の物品を登録致しました東大寺獻物帳にも、梓弓が八十何張か献上になつて居ることがあるのであります。その八十幾つかの中で、僅かに三張が、今日正倉院のお倉に保存せられて居ります。又大阪府下の河内の壺井八幡宮には、八幡太郎義家が奥州征伐の時に使つたといふ傳説のある丸木の梓弓などがあります。尊い所にありましたり、お宮にありますたりする所謂梓弓といふものを調べて見ますと、今日吾々が普通アツサと申して居ります木材と全く違つてをります。今日のアツサといふ木材は到底弓にするに足らない。ぽき／＼折れて毫も弾力な

どはない。所が正倉院の御物のものでも、この春藤原京の遺蹟で發見せられました梓の弓の斷片を見ました人の話に、その木材は最も強靱であつて、到底折ることが出来ない様だと申します。日本のアヅサの木材は到底吾々の力では容易に折ることの出来ない弾力性に富んだものであります。そのアヅサといふものは、今日の植物學上その道の人によつて調べて見ますといふと、樺の木科 (*Betula*) の一屬でありまして、今日の庭園植物で御覽になる所謂アヅサとは全然違ふのであります。むつかしい分類學上の名前で申しますと、ラテン語の學名で *Betula umifolia* といふしかつめらしい言葉を以て申されて居る。譯すれば榆の木、葉に似て居る所の樺の木といふ意味であります。これは亡くなられました白井光太郎博士が、古くその樺の木のことを調べられたことによつて、學界では定論となつて居るのであります。これは百年前に日本へ來まして、動植物を調べて歸りましたシーボルトといふ人が、梓といふ字の本義を知らずに斯ういふ單に植物學上から正確な名前をつけたのに由つたのであります。今日の地方の俗稱では色々のことを方言で申して居るのであります。普通植物學上の標準語では、ヨグソミネバリといふ名前を以て、信州とか、甲州とか、上州、野州、あゝいふ日本アルプス地帯を初め關東の山岳地帯に生長して居る所の樹木であります。これを六國志その他の文獻に徴しますと、甲州や信州から、アヅサの木を度々大和朝廷へ奉獻したやうな記録が見えて居るのであります。もつと古くには或は吉野とか、或は熊野とか、この邊の近畿地方の山嶽から出たものと思ひま

すが、奈良朝時代には甲州、信州邊りから出たと考へられます。果して今日の方言から考へて見ますと、信州邊の方言であるヨグソネバリといふ名を以てこの古典的植物名を呼んで居るのを、發見するのであります。標準的學名もヨグソネバリとなつてをり、又信州地方の山嶽國の方言中にはアツサとも申す地方があると申します。吉野、熊野邊りでは「はづさ」といつて居ります。越前邊りでも、上州邊りでも、はづさといふ名前があるのであります。

後世には、アツサと申して梓弓のことにになりましたが、梓弓を引いて人の運命を占つたり、死んだ人の靈を蘇らせたり、或は惡靈の祟りを防いだりするのを、梓ニカケルとかいつて、謠曲などでも、梓に掛ける巫女などのことがあります。中世以降の梓弓のことはよく分りませんが、梓巫女アツサメコの傳統を申せば上古の梓弓に遡るのであります。

それから私共讀書者であつて、圖書のことに關係して居るものでありますから、平素興味が深いのであります。梓に上せる梓に上せる、或は「上梓」といひましたり、「梓に鏤める」とか使ふ熟字がありますが、この上梓といつて圖書を木版に致しますものは、今言ふ日本の古典のアツサでもなければ、近時申して居るキササゲや赤メガシハの梓でもないのであります。支那でも恐らくは今日の梓木シボクを版木にするのではないのであらうと思ひます。御存じの通り、日本の木版の八九分通りは櫻の木に彫刻致すのであります。我國の名木たる櫻に鏤めるのは必然的のこのやうに考へるのであります。近松門左衛

門の天の網島の名残りの橋盡しの所にも、そのことが出て居ります。淨瑠璃に御興味のある方は、或はお思ひ出しになるだらうと存じます。「紙屋治兵衛が心中と、あだ名ちり行く櫻木に根掘り葉彫りを繪草紙の版摺る紙の其中に有りとも知らぬ死神にさそはれ行くと商賣に」といふ心中道行の文句が列ねてあります。紙屋治兵衛が吉野へ行く状態を、近松一流の麗筆で書いて居ります。といふやうなわけで、櫻に鏤めるといふことは、今日こそ段々後が絶えるでありませうが、誰しも知つて居ることでありませう。五山文學時代から、この櫻に鏤めるといふ熟字が出て來るのであります。尤も傳説と致しましては、弘法大師が櫻に書いて版にしたといふ傳説が或る寺にあるのであります。眞偽は分りませぬ。足利時代に五山文學の書物が五山版となつて出ましたが、その卷末の方に、櫻木に鏤めたとか、或は櫻木の板を何枚か寄附したといふやうなことが見えて居る。支那では梨の木とか、棗の木に鏤めるといふことが出て居るやうであります。日本では大和心のあらはれたる櫻に鏤めるといふことは面白い因縁であります。支那の梓といふのは刻してこれを版木にしたといふことではなくして、支那の梓といふ樹木は桑のやうに、可なりありふれた樹木で、棺材に使ふとか、或は古く宮殿の建築用材に使ふとか致して、可なり堅牢な樹木であつたやうであります。従つてこれを版木に使つたことはいふには言へないのであります。文獻に見えて居ります時代、恐らくは宋の時代以前には、その熟字がないやうであります。私甚だ寡聞淺識であり未だ究め及ばないのであります。一通り見た

所では、上梓などの熟語は宋時代の文獻には見えない様であります。梓といふ木に鏤めるといふことがあつても、それは梓といふ文字を上等の木材、堅牢な木材といふ意味に使つたのでありまして、梓木といふ特定の木材を指したのでなくして、單に良木に鏤めたといふ意味にすぎないのであります。これは斯道の先輩達の教へをいつかは受けたいと思つて居るのであります。私は唯今申したやうに考へて居るのであります。

さて本題に戻りまして、この梓といふ字は、支那では色々の場合に熟字になつて居ります。桑梓とか、梓里とかいふやうに熟字にして、詩文上で吾々の眼にも屢、觸れるのであります。

その梓といふものを、日本で何故アヅサといふ木に當てたかと言ひますと、これを支那では木王なりといふ説があつて、非常な良木である——支那で尊重した所の良木であるといふ所から、日本では武力を最も尊重した時代上古に於て、支那の梓といふ文字を藉りて、梓といふ木材に當てたのであらうと思ひます。その古い時代に日本は植物學が進んで居つたのでもない、漢學が進んで居つたのでもない、違つた樹木の名を當てたのも、致し方がないと申さねばなりません。日本のアヅサがベツラ・ウルミフォアリだといふのは間違ひないのであります。然らば支那の梓は何であるか調べなければなりません。日本の本草學者、大阪の岡元鳳といふ天明時代の學者、或は享保時代に丹後の宮津藩に仕へた江村如圭——江村北海よりも古い時代になる人であり、家の學問もあつたでありませ

うが、伊藤東涯先生あたりに私淑した學者のやうに考へられます——この江村如圭が詩經名物解といふ書物を書いて居りますが、それらにも色々のことが出て居りますが、實は文字だけのことで、實物の考證を致したわけでもない。實物と名稱との該當如何といふことを究めたこともない。況や支那の梓シといふ樹木を取寄せて見たわけでもない。漠然と文字上の解釋をしたに過ぎないのであります。今日の吾々の學問に對してはたよりない、信憑することが出来ないやうに考へられるのであります。今日支那でも色々新しい科學が開けて居りますが、動植物の學問のことなどは、私共の見る所が甚だ狭いではあります、一向進んで居らない。古典上の動植物を究めるにつきましても、一向時代上の考へもなければ、現代の所で實物の植物分類學上の規準もない。たゞ文獻上の考證だけに止まるのであります。近世「植物名物圖考」といふやうな大きな本が出来て居りませけれども、依然として舊套を脱してゐないのであります。上海あたりの自然科學研究所の先進の人に就て、色々文獻を求めようとしても、まだ求められないやうな有様であります。支那の古典植物の名義を研究したブレットシュナイデルといふ有名な人がありますが、この學者の「支那植物考」といふやうな書物がありますが、それらによるといふと、この梓は *Catalpa* (カタルパ) といふ種類に屬するのであります。日本ではこれを「キサ、ゲ」といふて、近世以降吾々がアヅサと呼んで居るのと同じであります。變種としては違ふやうであります、大體科を同じくし、屬を同じくするものであります。これもあまり實物を見究

めないでやつたのではないかと、考へられるのであります。それから數十年を経て割合に新しい時になりまして、今度はイギリスのロンドン郊外のキューガーデンといふ植物園の研究所に居ります、ウイリアム、ヘンスレーといふ學者が支那へ來て究めた所によりますといふと、梓ツヅといふ植物は樟科の植物であつて、カタルバとは違ふ、キサ、ゲ屬とは違ふ、Lindera Tsunmu(リンデラ、ツーム)即ち梓木ツヅキだといつて居ります。これは日本の「アブラギリ」で、名木たる樟と同じ樹木であります。日本のアヅサの樺の木とは全然違ふのであります。千有餘年前に於て、日本に於て斯くの如き支那植物の文字や名稱を日本の植物の實物に當てたのは、交通が非常に困難な時代であつて、名實の對照を試むることは不可能であつた時代でありますから、止むを得ず良い加減な漢字を持つて來て當嵌めるといふことになつたのであります。今日この開けた時代に於ては、萬葉集に見えて居る「梓」と、支那の爾雅、或は詩經その他普通の詩文にもあらはれて居る「梓」といふものとは全く違ふといふことは、もはや動かかないのであります。併しながら實は斯く申す私も、支那へ一二度行つたことがあるのであります。支那で梓ツヅといふ樹木を見たこともないのであります。纔に先覺者の研究を見て、紙上でこれだけのことを考へるのであります。唯吾々のやうに、文字の末と申しますか、言葉の末と申しますか、さういふ所に拘泥するのを以て、自分の専門と致して居ります者は、斯くの如きことは疑つたら最後、或る所までは色々先輩の知識を綜合し、利用して究めて置かなければならない。是に於て假り

に日本語の梓を英譯する場合に於ては、カタルバ (Catalpa) と譯するよりは、これをバーチ (Birch) と譯する方が適當である。或はむしろこれを Afusa といふ和名を以て譯する方がよいかも知れないと、考へるのであります。

それからもう一つ自分が逢著して、聊か問題にいたしましたことあるのは、「檉チイ」といふ植物であります。これは詩經大雅の皇矣といふ章にあります。あそこには色々な植物がありますが、此處の章にも日本では何の樹木を指すのか分らないやうな、たゞ字書で見ると、ぼんやり斯ういふ樹木だといふことが分るやうな植物が、多々出て參るのであります。この檉といふ樹木もやはり萬葉集に出て參ります。平安朝の字書類にも出て參ります。これは法隆寺、元興寺あたりの資財帳——財産目録といったやうな資財帳といふものがあります。そこにも佛具として、檉チイの木材で作つた所の函のやうなものが出て參るのであります。平安朝時代には、大和の宇陀郡の室生に「檉生チイノ」とこの字を當てたこともあります。それから播州ハクの室ムの港、中古から中世へかけて大へん有名な港であつた室ムにも、檉チイ(むしろ)この字を當てたことチイがあるのであります。萬葉集を見ますと、大伴旅人卿が、太宰府から奈良の都に歸つて來る途で詠んだ歌に、二首ばかり、備後の鞆の津の海岸に生長して居つた樹木として、「むろ」の木のことが詠んであるのであります。奈良の都でも一首「むろ」を讀んだ歌が見えて居ります。日本のむろといふ木は何であるかといふことと、支那の檉チイといふ樹木が示す植物が何であるかと

いふことを、一應考察を致して見たいと思ふのであります。檉チイといふ樹木は先刻申上げました通り、爾雅にも詩經にも出て居ります。支那に於ては、今日の方言、俗稱には無論斯ういふ名前は堙滅して居るかも知れませんが、古い地名などにも散見致して居るくらゐ古代には廣く知られてゐた植物であります。左傳の何處かに書いてありますが、「檉チイに會す」といふやうに地名も存して居ることもあります。六朝時代の詩文にも詠まれて居りますが、梁の時代の詩にも詠ぜられて居りますが、それらの詩文をはじめ、支那の字書などに見えて居ります所で、この檉チイといふ樹木を考へますといふと、幹が赤味を帯びて居るといふことと、もう一つの特徴は、雨が降らんとする前に、空氣の濕度が濃厚になると、その木の葉に露を帯びてくる。さうして其處に露の玉が出来るやうになつて来る。申さば、その樹木の葉は雨を豫知する晴雨計のやうなものである。雨を豫知するといふので、そのセンチブルな點について興へた別名を「雨師」といつたといふやうな説明が附いて居ります。或はこれは支那一流の民俗的な俗解かも知れませんが、木扁に「聖ヒシ」といふ文字を書いたのも、雨に非常に敏感であるといふ所から、名をつけたのであるといふ説があります。雨を知る聖ヒシ即ち日知りではなくして、雨知りだといふ所から、さういふ名をつけたわけなのであります。或はさうかも知れませんが、さういふやうな會意文字を作ることが支那では後世にも屢々あるのであります。近世我國に「御柳ギョリウ」或は誤つて「如柳ジョリウ」とした樹木がありますが、御柳ギョリウといふのは、支那で宮廷の池の畔りなどで生長するといふので、御苑

の柳即ち御柳といふやうな名をつけたのであります。傳説によりますと、唐の玄宗皇帝のお庭で、楊貴妃がこの御柳を愛したとかいふやうな話が詩などに出て來るのでありますが、支那では古くから庭園植物として觀賞されてゐるのであります。極めて楚々とした柔か味のある樹木で、これを松柏科植物に致しますといふと、檜葉だとか、榎だとかいつたやうなものと遠くから見れば、極めて葉の細かさ具合が似てゐるとも見られます。非常に柔か味を帯びた葉であります。小さな桃色がかつた赤い花が咲きます。これは支那では地方によりましては、三度花が咲くといふので、「三春柳」といふやうな名がありました。西河の邊りで多く繁茂するといふので、「西河柳」或は略して「河柳」といつたり致します。日本では普通の川端柳とは違ふので、支那の西河の畔りに良く生長するといふので西河柳といふ名をつけそれを河柳と略稱したのであります。詩經の「檉」を河柳なりと解釋してあるのを、川の畔りの柳なりと讀んで古くから川端柳のことだと誤解して居つたのであります。これは植物の分類學上で見ますと、柳のやうな氣分がないのではないのであります。御柳科といふ一種獨立の科がございまして、Tamarix といふ一科を成して居る植物であります。フランスの南の方とか、エジプトとか、アラビヤとかにはよく生長してをります。又アジャの方でも中央アジャから支那の北部の方へかけても、生長して居るさうであります。とにかく日本には原産がなくして、支那には古くから知られて居つた樹木であります。これはいつから日本へ來たかといふと、凡そ享保時代、丁度懷徳堂の開

設時代に、支那から渡來したといふことに考へられるのであります。嘗て私は伊藤東涯先生の紹述文集をあつちこつち見てをりました時に、詩集の中に「御柳」と題して、この御柳のことを詠んだ七言律一首を見出したことがあります。これは恐らくは日本で御柳ギョリウといふものを、文字の上に現はした最初のものでないかと考へられるのであります。東涯先生詩集の卷の六であります、それに甲子といふ年號がありますが、それを年表に照しますと、享保五年に當つて居ります。婀娜たる柔條といふやうな文句がその中に見えて居ります。これは確に御柳の柔か味を現したものだと思ひます。これは實物を見たのでないといふやうな疑ひが絶對にないとは申されませんが、後世の本草學の書物に、享保時代に支那から渡つたといふことが書いてありますのと相照して、これは畫やなどによつて東涯先生が作つた詩でなくして、實物が享保時代、或は遡つて元祿時代に傳はつたのだと考へてもよいと思はれます。但し元祿以前には未だ文獻には出て來ないのであります。

所がそれに對して萬葉集をはじめ奈良朝の文獻や、平安朝初期の文獻に、この「檉チ」といふ字が使つてあるのはどういふものか、「檉チ」といふ名前と、「むろムロ」といふ植物の實質が當るや否やといふことを調べて見たいと思ひまして、色々の書物を調査したことがあつたのであります。この「むろムロ」といふ言葉も古今の言語の變遷のうちには多々變化の跡があつたのであります。或る地方の方言には「ぼろん」といつてをります。今日普通の稱呼で申上げますれば、「ねずみざし」といふ樹木であります。

支那の文字で「杜松」といふのがそれに當ります。このむろの木を今日の植物の標準語では「ねずみざし」、略して「ねざざし」ともいつて居ります。松柏科植物で、木材は緻密で、かなり上等の材で、白檀などに次ぐ所の、上等な木材と認められて居るのであります。それが丁度むろに當るので、タマリックスではなく、ジュニペルス(Juniperus)といふのに當つて居ります。ジンといふ強い酒がありませんが、あのジンはこのジュニペルス、即ち杜松の實から採ります酒で、ジンといふのは、ジュニペルスのジンをなまつたもので、これは既に徳川時代からは長崎に輸入されて居た強い酒であります。それでこのジュニペルスといふ樹木は、萬葉集の檜ヒノといふ樹木でありませんが、支那の檜ヒノとは文字は同一であります。物は異なつて居ります。植物學者のみならず又吾々のやうな文字言語の詮索者たるものにとつては十分な注意を拂ふわけでありすけれども、支那や日本の古代に於ても、タマリックスの文字をジュニペルスの植物に移して轉用することになつて居つたやうであります。それで後に支那でも困つたと見えまして、松柏科植物のジュニペルスの方は「栢」などと呼んで居りますし、タマリックス即ち河の畔りに生長して楊柳科の檉シロに近い趣きがあるといふので、「檉栢」などといふ文字も現はれて來たのであります。その文字が色々のものに見えて居るのであります。六朝の南史、北史といふあの南史の或る列傳には「檉栢」といふ文字が使つてあります。それからあの時分の佛教の高僧の傳などにも、「檉栢」を以て佛具を作つたといふやうな記事があります。でありますから、佛像

なり或は佛具なり、佛様に捧げる器物なりは、白檀とか沈とかあゝいふやうな名木で、大部分松柏科の樹木の木材を使つたと思ひますから、「檉栢」はタマリツクスそのものではなくして、タマリツクスに似た趣のあるジュニペルスのものであらうと考へてもよいかと思ふのであります。

さういふやうな風に支那の植物名などの漢字は吾々の先輩が、彼我の名稱や實物の對照について、十分植物學的にも、考證學的にも究めないで、たゞ漫然支那の文字を日本の國語へ持つて行つて、何か一つ當てたいといふので試みに當てたのが残つたものが、かなり多く存することを悟るのであります。むろん「天」の字を「そら」に、「水」の字を「みづ」に、「火」の字を「ひ」に當てる如く、「木」をキ、「草」をクサに當てゝあるのは、何等問題にはなりません。動植物その他人事界の色々なものに對しては、一々詮議をして漢字を當てたのでない限りは、又一々の場合にさういふやうな詮議の餘裕は到底容されませんから、齟齬くひちがひのあることは致し方ない事でありまして、吾々の疾くに承知致して居らねばならぬ所であります。

此處に木の盆があります。この盆は木材で出来て居ります。或は金屬で出来て居つてもいいのであります。支那の盆といふ文字は、御承知の通り元は土器であります。さうして斯ういふ平たい淺いものではなくして、もう少し深いどつちかといへば、つぼまつた壺とか、鉢とか、手を洗ふやうな盥やうのもの、色々の形のものはありませんが、第一土製であるといふことと、もう少しつぼんだ壺や

のう稍深い鉢やうのものであるといふことは、盆といふ文字の原義上、少しく詮索すれば分ります。植木鉢の鉢もさうであります。即ち盆栽の盆の字も、今日我國でいふ普通の盆とは違ふ。尤も孟蘭盆の盆はサンスクリットに當てた假借の音譯字なのでありますから、これは除きます。盆といふ文字も、日本では段々支那の文字の原義を失つたのであります。丁度今から滿一千年前に編纂された和名抄あたりにある盆はやはり土製であります。どういふ経路でいつ頃から淺い木材、或は金屬製のものになつたかといふことを、詮議して見ますといふと、恐らくはその字義の變化は中世足利時代の末期から近世の初期徳川時代にかけてのことであると思ひます。盆といふ名は日本の色々の文獻に見えて居りますが、一々こゝで考證は致しません。支那の盆と日本に於ける普通の定義とが、斯くの如くずつと離れて來て居るといふが如き類例は、多々他にもございますけれども、時間がありませんので省くことに致します。

もう一つ、序でに盆の字に因んで申し添へて見たいことが残つてをります。即ち白砂糖の非常に品質のいゝものを三盆白といふが、あの盆といふのはどういふ所から出たかといふ問題を近ごろ人から出されたので少しばかり語原を取調べてみたことがあります。三品(サンボン)の官位の支那人が日本に貢獻したとか、三つの盆に砂糖をのせて支那人が日本人に貢獻したといふやうな、こぢつけの語原説が出て居りますが、それは取るに足りません。色々考察致して見ますと、三盆の盆は支那の盆で日

本の盆ではない。或る字書には、盆の上に餅を置いたやうな形に砂糖がかたまるから、三盆といふのだ。三盆といふのは一盞を傾けるといふやうに、盃を盆の上に傾けたやうに砂糖がかたまるといふやうな説も見えて居つたのでありますが、支那の色々な地誌類を見ましたり、臺灣風土誌といふやうなものを見ましたり、砂糖の製造法を書いたりしたのを見ました。或は東亞同文書院で出版した支那の風土誌の福建省の砂糖の製造法などを一通り見ました所が、土製の植木鉢のやうなものに、甘蔗の汁をたいて溶かした汁をその中へ入れて、下の方は穴をあけて段々漏れるやうにする。その上へ土をのせて灰汁が土の方へ沈澱して、いゝ砂糖が下へ漏れて来るやうな装置にして砂糖を造るらしいのです。これも直接實物を見ずに申すのでありますが、それらの風土誌で見た所によると、さうらしいのであります。さうして見ると三盆といふことは、鉢へ粗製の砂糖の汁を入れて土でその上を覆うて、いゝ砂糖を下へ出すか或は上へ霜が置くやうに白い砂糖が出来るか、ともかくも支那風の意味の盆を利用して、その盆が三つあるか、或はさういふ一つの作業を三度繰返すか、どつちかであらうと推定されるのであります。實地を見たわけでもないのでありますから、詳しい製造法はわかりません。大體の仕方がさういつたものでないかと想像するだけであります。

それで支那の古典の禮記の祭義の所に、蠶絲を紡ぐときに諸侯の夫人がほんの儀式的に三度手を盆にする——「三盆手」といふ文字があります。三度盆を手にするといふので、諸侯が稻を耕す時に、鋤

を以て土を三遍耕す眞似をする。それで一つの禮の儀式になつて居る。諸侯の夫人は繭から絲を抽出す手初めとして、土製の鉢のやうな物に入れてある所の繭から絲を取る業を手初めにするので、三度盆の中へ手を入れる。さうして後は家來どもが絲を取るのでありませうが、禮記に三度手を盆にするといふやうな文句がありましたので、ヒントを得まして、調べたのでありますが、三盆といふことも決して直接に、禮記から取つて來たものでないと思はれるのでありますけれども、盆を三たびするといふ意味ではないかと考へたのであります。禮記の祭義第二十四といふ所に、「及ニ良日ニ夫人ニ繅ニ三盆ニ手ニ遂布ニ于三宮ニ夫人世婦之吉者ニ使レ纁ク」といふ文句があるのであります。これは一つの儀式に過ぎないのであります。さうして見ると三盆といふことは、禮記から直接に取つたのでないことも分るのであります。意味は、まだ粗製の砂糖を盆の中へ入れて、さうして土で灰汁を取つて、上へ抜けるか下へ漏れるかする方法によつて、砂糖が精白されるといふそのことをいつたものでないかと想像したのであります。福建省あたりで、俗語でさういふ器物を現に盆といふかどうか調べて見ますと、盆とはいつて居らないやうであります。色々の名前がついて居るのであります。礪の字が書いてありましたり、瓦溜といふ字が書いてあつたりします。私の解釋は古典的の文字を以て近世的の事柄に當てて、少しペダンチックな解釋のやうにも考へられるのであります。禮記から直接取つたとは言へないまでも、源を同じうするだらうが、その當時の文字そのものが、さういふやうな考へから、三盆白

といふやうな名をつけたのでないかと思ふばかりであります。日本に於ける三盆白といふ文字は、明和、安永頃から、支那から長崎への輸入の物品を取扱つた記録から、初めて三盆といふ名が出て居ります。蓋に三盆と書きましたのはもつと古くから元祿少し後の「和漢三才圖繪」に見えてをります。

もつと詮索して見たら出て来るか知れませんが、私の詮索して見た所では、さういふものであります。

斯様なわけで、支那の文字の原義と、日本の文字が意味するのと違ふ所が、古今共に多い。段々文字も變遷すれば、言語も變延するのでありますから、これをとめることは出来ませんが、今後は過去より一層多く紊れると思ひます。しかしながら殊に言語を研究する者に取りましては、これは本義を究めて置くことが、必要であらうと思ひます。日本には色々宛字があります。日本の國語に向つて漢語めいた漢字を言ふことが澤山あります。支那の原義を段々明かにしなければならんと思ひますが、日本の國語の本義は愈々確かめて置きたいと思ふのであります。日本の國語に向つては、いかゞはしい當字をするなどは止したい。少くとも漢語らしいことを裝ふことは止めたいと思ふのであります。「めんだう」といふのを「面倒」といふ字を書き、「厄介」といふことも國語を漢字に當てたので、支那にあるわけではない。「面倒」といふことも、支那の字引を引いて見ても、出て来ることはなからうと思ふのであります。ヤツカイといふ俗語が、吾々の「厄介」といふ文字の各々の字義に當るといふやうな氣持があるものでありますから、あの字を吾々が使つて、平氣で居る。こゝには此種惡例中の九

牛の一毛を擧げたに過ぎません。

それでさういふやうな漢語めかした漢字を使つて居る間に、その漢字の根底に澤山の國語が潛んで居るといふことは、今日は時間が乏しいので申上げませんが、「とけい」といふ語に、「時計」といふ字を當てて、「と」に「時」といふ字を當て、「けい」に「計」の字を當ててあります。あれらは支那の文字の本原を却つて悪化したもので、あれは段々詮議をしますと、支那の周禮に見えて居る「土圭」といふ言葉から出たので、徳川氏に至りましても、尙この文字を使つて居るのが往々あるのであります。但し、由緒のある「土圭」といふ語を捨てて、これに時を計るといふ意味だと誤解して時計といふ字を書いて見たに過ぎないのであります。土圭といふ物は玉（オビシク）で拵（オビシク）へました周の時代の尺度器で一尺ばかりの細長い器を、平盤の上に置くと、太陽の光で影が出来る。その影によつて先づ緯度の測定を致して、都市計畫とか、或は宮殿の建築とかをきめたらしく考へるのであります。そのうちにこれが日時計となつて、緯度を計算する意味が、時間を測定するといふ意味に變じて、日本の中世には日土圭即ちサン・ダイアル(Sun dial)の意味の時計といふ意味に用ひられて居つたことが、足利時代の文獻に見えて居るのであります。これを測る時の器は水ドケイ、砂ドケイなどが、日本の中古まで用ひられて居つたのであります。土圭は主として日土圭の場合に用ひられたのであります。日土圭は砂漏ともいふ砂土圭、漏刻と呼ぶ水土圭に對しては非常に不便でありますから用ひられなかつたのですが、

併しながら中世期から文獻に現れて來たのであります。まだ南蠻人が西洋から渡來しなかつた以前から土圭といふ文字があるのであります。南蠻の西洋人が來ました時に、大内義隆が日土圭を献上したことは有名な話であります。その當時の東西の文獻記録などにも明記してあります。

さういふやうなことで土圭といふ意味が失はれて、時計といふやうな字を使つて、言語の本義を失つてしまつたのであります。致し方がないとは申すものの、吾々専門の者に取つては、斯ういふものも一通り調べなければならぬのであります。國語漢字の本義を考證するといふやうなことは吾々にとつて重要な事柄であるばかりでなく、一般の智識階級の人々にとりても不必要なことは考へませんので、この機會を利用して、私の平素調べました所の一端を皆様に申上げて、更に皆様の御高教を得たいと存じて、つまらぬお話を申上げた次第であります。(終)

—— 堂友會員藤塚誠堂速記 ——

(昭和十年十月五日講演の速記録を翌十一年七月三十日修訂せるもの)